

シラバス
労働経済学 I

一橋大学大学院経済学研究科

2006 年度夏学期 火曜 4 時限 (2:40pm-4:10pm)

川口大司 (kawaguch@econ.hit-u.ac.jp)

研究室: 磯研 401 号室

オフィスアワー: 月曜日 5 時限 (4:20pm-5:50pm) (予約不要)

上記以外の時間の面談を希望する際は E-Mail で予約すること。

1. 講義の概要・目的

労働経済学におけるいくつかのトピックスを大学院レベルで講義する。労働経済学には、それぞれがとても有用なさまざまな研究手法が存在するが、この講義ではマイクロデータを用いた誘導形の実証研究を中心として紹介していく。特に操作変数法と自然実験を用いた実証分析に重きをおいて説明していく。各トピックに関して、基礎となる理論的なバックグラウンドを紹介した後はマイクロデータを用いた実証分析の手法について紹介する。

2. 履修要件・他の講義との関連

学部上級～大学院中級レベルのミクロ経済学・計量経済学の知識を前提とする。上級の計量経済学的な知識に関しては時間の許す範囲でそのつど紹介する。今学期、火曜日の 2 時限に川口により応用計量経済学が開講されているため、並行しての履修を勧める。

租税や社会保障制度は労働供給と密接に関連するし、教育や職業訓練には公的な介入しばしば行われるため公共経済学との関連が深い。また、労働供給とはすなわち余暇の消費であり、その意味で消費や貯蓄といった家計行動を取り扱うマクロ経済学との関連もふかい。計量経済学的な推定のテクニックは産業組織論から学べるところが多い。

3. 基本的な考え方

労働に関連する諸問題には人的資源管理、法律、社会学といったさまざまな学問分野からのアプローチがありえるが、さしあたりは経済学のディシプリンにしっかりと軸足を置きつつ、分析を進めることが大切である。

4. 成績評価

期末試験(50%)ならびにタームペーパー(50%)によって、成績をつける。タームペーパーはマイクロデータを使った労働経済に関する実証分析であることが求められるが、対象国は問わない。また、過重な負担を避けるためタームペーパーはリサーチプロポーザルだけでもかまわないし、欧米の研究を日本のデータを用いて replicate する研究でもかまわない。使用言語は英語または日本語とするが、英語での執筆を強く勧める。

実証分析の結果を報告するにあたってはその図表の作り方などに一定のルールがある。Wooldridge (1999) Chap. 19 が良い実証分析のしかたならびに報告の仕方についてアドバイスをしているので一読すること。また

- Daniel Hamermesh (2000) “The Craft of Labormetrics,” *Industrial and Labor Relations Review* v53, n3, pp. 363-80

は実証分析の結果報告を行う上での貴重なアドバイスをしている。こちらも読むこと。

5. 参考文献その他

- Borjas (2005) “Labor Economics,” Prentice Hall.
- Cahuc and Zylberberg (2004) “Labor Economics,” MIT Press.
- Ashenfelter and Card (Eds.) (1999) *Handbook of Labor Economics*, Vol. 3 A-C

この講義で扱う論文のほとんどすべては<http://www.jstor.org/>よりダウンロード可能である。シラバスにそって講義をするので、講義を受ける前に必ず論文を読んで予習をして、授業当日のディスカッションに参加すること。

講義の中では学部上級～大学院中級レベルの計量経済学の知識は前提とする。基礎に不安があるものは以下の学部レベルの教科書を用いて復習を行うこと。

- Jeffrey M. Wooldridge, *Introductory Econometrics*, South Western College Publishing, 1999
また、以上の本でカバーされない知識に関しては以下の本を参照すること。
- Jeffrey M. Wooldridge, *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, The MIT press, 2001

6. 講義内容

以下の項目を講義する予定である。予定は変更されることがありうるが、その都度クラスで連絡する。

1. 労働経済学における実証分析 (4 週間)

一般的な議論

- Angrist and Krueger (1999) *Empirical Strategies in Labor Economics*, HOLE 3A, chap. 23.
- -Instrumental Variable Estimation.
- Angrist (1989) Lifetime Earnings and the Vietnam Era Draft Lottery: Evidence from Social Security Administrative Records, *American Economic Review*, June 1990, Vol. 80, No. 3, pp. 313-36.
- Angrist and Imbens (1994) Identification and Estimation of Local Average Treatment Effect, *Econometrica*, Vol. 62, No. 2, pp. 467-475.
- Angrist, Imbens and Rubin (1996) Identification of Causal Effect using Instrumental Variables, *Journal of American Statistical Association*, Vol. 91, No. 434, pp. 444-455.

-Fixed Effects Estimation

-Difference in Differences

-Regression Discontinuity Design

- John DiNardo and David Lee (2004) “Economic Impacts of New Unionization on Private Sector Employers: 1984-2001,” *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 119, No. 4, pp. 1383-1441. (Ingenta Select よりダウンロード可能)

2. 賃金関数、賃金分布 (3 週間)

教育投資の理論

- Borjas (2005)
- Card (1999) “The Causal Effect of Education on Earnings,” Chapter 30, HOLE

教育の収益率の一致推定

- Joshua Angrist and Alan Krueger (1991) “Does Compulsory School Attendance Affect Schooling and Earnings?” *Quarterly Journal of Economics*, Vol. 104, No. 4, pp. 979-1014.
- John Bound, David Jaeger and Regina Baker (1995) “Problems with Instrumental Variables Estimation when the Correlation between the Instruments and the Endogenous Explanatory Variables is Weak,” *Journal of American Statistical Association*, Vol. 90, pp. 443-450.

- Orley Ashenfelter and Alan Krueger (1994) “Estimates of the Economic Return to Schooling from a New Sample of Twins,” *American Economic Review*, Vol. 84, No. 5, pp. 1157-1173.

在職年数が賃金に与える影響の一致推定

- Robert Topel (1991) “Specific Capital, Mobility, and Wages: Wages Rise with Job Seniority,” *Journal of Political Economy*, Vol. 99, No. 1, pp. 145-176.
- Christian Dustmann and Costas Meghir (2005) “Wages, Experience and Seniority,” *Review of Economic Studies*, January 2005, v. 72, No. 1, pp. 77-108.

公共職業訓練が賃金に与える影響の一致推定

- Robert LaLonde (1986) “Evaluating the Econometric Evaluations of Training Programs with Experimental Data,” *American Economic Review*, Vol. 76, No. 4, pp. 604-620.
- David S. Lee (2005) “TRAINING, WAGES, AND SAMPLE SELECTION: ESTIMATING SHARP BOUNDS ON TREATMENT EFFECTS,” Working Paper 11721
<http://www.nber.org/papers/w11721>

自己選択が賃金プロファイルに与える影響 –Roy Model の応用-

- Daiji Kawaguchi (2003) “Human Capital Accumulation of Salaried and Self-Employed Workers,” *Labour Economics*, Vol. 10, No. 1, pp. 55-71. (Science Direct よりダウンロード可能)

3. 労働需要 (3週間)

静学的労働需要モデル

- Varian (1992) Chapter 2, 3 など標準的なミクロ経済学の教科書の要素需要の項
- David Card (1989) “The Impact of the Mariel Boatlift on the Miami Labor Market,” *Industrial and Labor Relations Review*, Vol.44, pp. 245-257.
- Joshua Angrist (1996) “Short-Run Demand for Palestinian Labor,” *Journal of Labor Economics*, Vol. 14, No. 3, pp. 425-453.

最低賃金論争

- David Card and Alan Krueger (1994) “Minimum Wages and Employment: A Case Study of the Fast-Food Industry in New Jersey and Pennsylvania,” *American Economic Review*, Vol. 84, pp. 772-793.
- David Neumark and William Wascher (2000) “Minimum Wages and Employment: A Case

Study of the Fast- Food Industry in New Jersey and Pennsylvania: Comment,” *American Economic Review*, Vol. 90, No. 5, pp. 1362-1396.

- David Card and Alan Krueger (2000) ““Minimum Wages and Employment: A Case Study of the Fast- Food Industry in New Jersey and Pennsylvania: Reply,” *American Economic Review*, Vol. 90, No. 5, pp. 1397-1420.

5. 補償賃金格差 (1 週間、時間があれば)

- Borjas (2005) Chapter 6
- Jeff Biddle and Gary Zarkin (1988) “Worker Preferences and Market Compensation for Job Risks,” *Review of Economics and Statistics*, Vol. 70, pp. 660-667.
- John Garen (1988) “Compensating Wage Differentials and Endogeneity of Job Riskiness,” *Review of Economics and Statistics*, Vol. 70, pp. 9-16.

期末試験 2月6日 (持ち込み不可)

タームペーパー提出締め切り 1月30日

Texas 大学の Don Fullerton 氏のホームページにきわめて簡潔かつ実用的な論文の書き方に関する2組のハンドアウトがある。ダウンロードして彼のアドバイスに従うこと。メールに添付して30日の夜中の12時までに送ること。プロポーザルを書く場合、イントロダクション、データについての説明、推定モデル、推定に当たって予想される問題点、問題点の解消法など、推定結果と結論を除いては論文の形式をとったものを書くこと。実際に用いることの出来る個票としては Japan General Social Surveys(東大社研)、Japan Panel Survey of Consumers(家計経済研究所)、TIMSS などがある。時間がかかるので早急に手続きを進めること。また、欧米や発展途上国のデータセットを用いた研究でもかまわない。